29【P2】Ⅱ-258

星製薬株式会社幻のPR誌

○三澤 美和[1]([1]星薬大・薬理)

星一は 1911（明治 44）年に星製薬株式会社を設立したが、大正年間に破竹の勢いで発展を遂げ、会社は一躍日本一の製薬会社に成長した。「赤缶」で有名な星胃腸薬を含めて数多くの医薬品等を製造、販売したが、主力はモルヒネ、コカイン、キニーネなどのアルカロイドであり、いずれも国産初の製造であった。これらアルカロイド製品はすでにこの時代に欧米諸外国に高額輸出された。

星製薬株式会社は星一の個性が強く浸透し、宣伝能力が非常に高い会社であり、独特な宣伝活動を展開した。星一は米国の大学留学中に週刊新聞『日米週報』を発刊していた。学生の身で新聞記者兼社長として新聞社の経営を行ったジャーナリストとして育んだ経験と星一の生来の個性がその独自の宣伝力を産み出したに違いない。

1910（明治 43）年星一は雑誌『新報知』を発刊した。次いで 1912（大正元）年、広告誌『家庭の花』を刊行した。誌面の約 3 分の１は星製薬株式会社発売のくすりの広告や記事で占められている。1913（大正２）年『星製薬株式会社社報』が創刊され、月 2 回発行され続ける。『新報知』と『家庭の花』はその後統合されるが、これら雑誌の内容はほぼ一貫しており、例えば、名家の論説、最近思潮、衛生記事、評判の芝居、文壇大家の小説、少年の読物、家庭料理、お国自慢、家庭文芸（川柳、和歌など募集）、時事写真、風刺漫画、偉人伝、法律相談、廃物利用、星占いなど、すべて老若男女にも面白くためになる記事を豊富に載せた。その制作思想には米国留学中の新聞発行の流れが色濃く読み取れる。星一一流の宣伝能力は会社やくすりの宣伝ばかりでなく、特約店の士気鼓舞、一般社会の人々の社会教育までをも視野に入れていたと思われる。星一は社会教育者であった。